

別紙

治山施設等の名称 「カスリン・アイオン台風の大災害の記憶を伝える治山事業」

所在地 岩手県宮古市門馬第2地割字門馬山国有林

工事期間 昭和25年～平成17年

施設・工法の概要

溪間工、土留工74基（H17時点） 山腹工 11.26ha

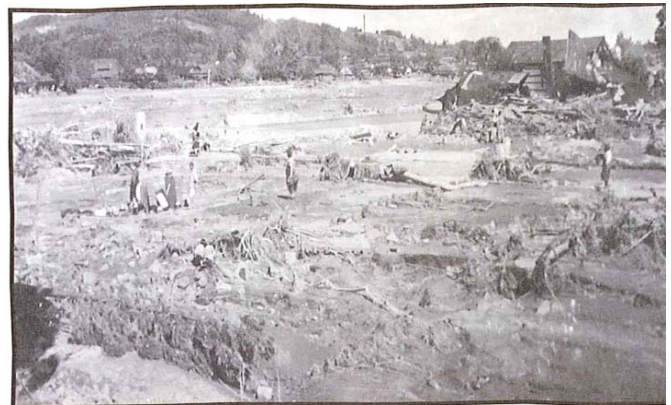
解説（要約）

昭和23年のアイオン台風により山腹崩壊、河道閉塞等によって山津波が発生し下流域の市町村（宮古市、旧川井村、旧新里村）に甚大な被害を与えた。この災害からの復旧、復興のため昭和25年から被災流域に治山施設を施工し平成17年までに溪間工等47基、山腹工等11.26ha実施し、その後大きな被害も無く現在は森林に復旧しつつある。

解 説

昭和23年9月16日から17日にかけて、記録的な豪雨（期間雨量249.3mm気象庁データより）をもたらしたアイオン台風により宮古市内を流れる閉伊川の支流で早池峰山に位置する御山川や薬師川が増水し河川が氾濫した。

このとき早池峰山では1日の降雨量が250mm、4時間の降雨量は100mmという猛豪雨であったために、御山川支流の石合沢で距離にして約1キロメートル、面積約28ヘクタール、70万立法メートルに及ぶ大崩壊地が発生、



昭和23年7月台風で被害を受けた川井村（現宮古市）

崩壊した土砂により河川がせき止められ、天然のダム（土砂ダム）が形成され、その後決壊し激流となり、山津波となって御山川へ一気に流下し、誘発した荒廃地は約40ヘクタールにも上った。

この山津波は連続2回も起こったと言われており、下流域での被害は宮古市（旧川井村、新里村含む）の住民370余名が死傷し、民家の全壊や床下浸水等の被害6,200戸余り、田や畑などありとあらゆるものが飲み込まれたと言われている。

さらに濁流により鉄道や道路も寸断され旧川井村門馬地区をはじめ宮古市内各地区では文字通り陸の孤島と化した。

この大災害をきっかけとして、以後石合沢上流部をアイオン沢と呼ぶようになったと言われている。

昭和25年にはアイオン台風災害後の本格的な復旧工事が始まり、閉伊川に近く、鉄道や道路、民家に近い「御山川1号」えん堤から着手を開始した。

着工から2年で完成したこのえん堤は、長さ103m、高さ12m、体積5,908立法メートルと完成当時は国内最大級を誇るもので、現在でも約56万立法メートルもの土砂を貯留することにより下流域の保全を図っている。

昭和30年代に入ってから、直接アイオン沢からの土砂の流出を防止するための工事に着手し、昭和55年までに溪間工等14基、山腹工約10haの施工実施したところである。

ところが昭和55年5月21日夜半に台風3号による豪雨が原因でアイオン沢左岸側約1.5haが崩れ落ち、約2万5千立方メートルもの土砂が流出、それまでに施工した溪間工5基が被害に遭ったものの、土石流の勢いを弱めることにより、下流にある国道106号や鉄道への被害を最小限に抑えることが出来た。

以降平成17年までの55年間で溪間工、土留工合計47基、山腹工11.26haを施工、荒廃したアイオン沢の復旧と下流域の生活の安定を図るべく治山工事を実施し、この間たび重なる台風や豪雨が合ったものの、大きな被害も無く現在は植生が回復し森林に復旧しつつある。



昭和55年台風3号による被害



現在のアイオン沢

